



令和4年度
地域福祉拠点設立推進プロジェクト

事例集



広島県老人福祉施設連盟

目次

Contents

I. はじめに	2
II. 地域福祉拠点設立推進プロジェクトについて	3
III. 地域共生社会の実現に向けた取り組み 実践事例	
1. 令和4年度研究発表会 発表施設の取り組み	
〔特養・養護〕 特別養護老人ホーム瀬戸すみれ園(福山ブロック) ..	4
〔養護〕 養護老人ホームひかり苑(尾道ブロック)	7
〔地域密着〕 特別養護老人ホームすいれん(三次ブロック)	10
2. 令和5年度研究発表会 発表施設の取り組み	
〔特養〕 特別養護老人ホーム大崎美浜荘(東広島ブロック)	14
〔養護〕 養護老人ホーム呉清光園(呉・海田ブロック)	18
〔特養・軽費〕 特別養護老人ホームゆりかご荘(廿日市・可部ブロック) ..	22
IV. 令和4年度(2022)総括	25
V. 関係資料	
1. 令和4年度研究発表会 発表施設の抄録, スライド	
〔特養・養護〕 特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園	27
〔養護〕 養護老人ホームひかり苑	34
〔地域密着〕 特別養護老人ホームすいれん	41
2. 令和4年度地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議 委員名簿 ..	50

I. はじめに

平成28(2016)年の社会福祉法改正により、社会福祉法人の公益性・非営利性を踏まえ、法人の本旨から導かれる本来の役割を明確化するため、「地域における公益的な取組」の実施に関する責務規定が創設されました。

その背景には少子高齢・人口減少社会という国が抱えている大きな課題がありました。これらの課題は国の経済・社会存続の危機にもつながります。その危機を乗り越えるためには地域力を強化して持続の可能性を高めていくことが必要と考えられています。地域力強化には福祉の領域を超えた地域全体が直面する課題を改めて直視する必要がある、支え手側と受け手側に単に分かれるのではなく、誰もが役割を持ち、活躍できる「地域共生社会」の実現が求められています。

そのような環境の中で、地域共生社会実現に向けて広島県老人福祉施設連盟では平成30(2017)年より『地域福祉拠点設立推進プロジェクト』を通して県内各地域における会員施設の実践事例を紹介させていただいてきました。

今回もコロナ感染症拡大の中での各地域の会員の実践事例を紹介させていただきます。

今後、地域共生社会実現という動きの中で私たちが持っている資源(専門性や経験・建物・器具など)をより活用することは地域との連携、繋がりをより深めていくことになり、その活動がプロジェクトの目的でもある県内各地域で会員施設、事業所が地域拠点になっていくことになります。また地域拠点になることは今後の施設、事業所の運営、経営の面においても重要なことではないでしょうか。

会員施設、事業所の規模や、各市町の人口をはじめ地域を取り巻く環境、状況は異なります。しかし取り組み内容について「正解はひとつ」ではありません。自分の施設、事業所の強みを再確認して地域との連携、繋がりづくりの活動を小さなことからでも取り組んでみてください。

最後にこの事例集が会員施設、事業所の地域拠点づくり活動の何かヒントにいただければ幸いです。

令和5(2023)年7月

広島県老人福祉施設連盟

会 長 中 川 勝 喜

Ⅱ. 地域福祉拠点設立推進プロジェクトについて

1. 経緯・経過

(1) 経緯

広島県老人福祉施設連盟では、平成 30（2017）年度より、各施設の地域共生社会実現に向けた取り組みがより効果的・効率的に進むよう「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として取り組んでいる。老人福祉施設が地域の福祉拠点になるための取組は、地域共生社会の実現に向けた社会的要請に応えるとともに、老人福祉施設が地域住民から選ばれる施設になるために必要なものだと考え、プロジェクトを立ち上げ取り組み続けている。

(2) 経過

- 平成 30 年度（2017）、初年度のプロジェクトでは、会員が地域共生社会の実現に向けた取り組みを推進できるよう「地域福祉拠点設立のための手引き」をまとめた。
- 平成 31 年度（2018）は、広島県からの委託を受けて、地域福祉拠点としての取組が推進するよう「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として、県内 6 ブロックの代表施設がプロジェクトをすすめ、その成果を事例集としてまとめた。
- 令和元年度（2019）は、本連盟自主事業として、前年度参加施設の継続した活動や、新たな参加施設の取り組みがより効果的・効率的に進むよう「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として取り組み、その成果を事例集としてまとめた。
- 令和 2 年度（2020）は、本連盟自主事業として、コロナ禍において、これまでのプロジェクト参加施設が、地域福祉拠点としての取り組みに受けた影響を検証し、コロナ禍でも、地域福祉拠点として取り組める工夫やその内容を事例集としてまとめた。
- 令和 3 年度（2021）は、本連盟自主事業として、これまでのブロック毎から、事業種別毎（①特養、②軽費、③養護、④その他（地域密着デイなど））の選出に変更し、特に「軽費・ケアハウス」は積極的な公益的活動の推進により、その存在価値を発揮することが求められている状況にあるため、本プロジェクトへの参加がそうした活動の後押しや支援につながるよう進めた。また、本連盟として成果を発表・共有・講評を得られるよう、広島県老人福祉施設等研究発表会で 3 施設が報告した。

2. 令和 4 年度の取り組み

- 継続委員－プロジェクトで進めてきた取り組みを、令和 4 年度広島県老人福祉施設等研究発表会で報告し、評価を得ると共に、連盟施設に取り組みの意義を伝える。
- 新 委 員－これまでの自施設での取り組みを踏まえ、プロジェクトにおける会員施設の取り組みを冊子等から事前確認した上で、自施設内で推進チームを立ち上げ、事前に抄録の項目に基づいて取り組みテーマ、課題などを協議・整理してプロジェクトに臨む。また、プロジェクトを通じて、他の委員から課題の置き方や具体的な取り組み方法などを収集し、2 年間での取り組みを進めていく。

Ⅲ. 地域共生社会の実現に向けた取り組み 実践事例

1. 令和4年度研究発表会 発表施設

いろいろと不安はありつつも、目線は外へ ～感染症と向き合い、出来ることを考えて～

【福山ブロック】 特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

- ・2018年より地域との交流を図り、様々な交流を行ってきたが、2020年のコロナ禍以降、感染を恐れ交流に関する活動が減る。
- ・感染症との共生から、施設として何が出来るのか模索。
- ・2021年に民事再生となり、利用者様、家族様、地域の方々へ不安を与え、施設内も混乱となる。不安はありつつも、今出来ることを考え、再度施設としての魅力を発信していく。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域のために、手助けとなる福祉施設であること

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の"見たい未来"を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域との継続定期的な繋がり。
2	施設全体として取り組みやすい地域貢献活動
3	福祉教育を中高生に向けて行う。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	感染症拡大の懸念より、中止していた運営推進会議を地域住民等参加促し、開催へつなげる
2	感染者数を考慮しながら、施設内職員が参加しやすい清掃活動への参加継続
3	企業が行っている中高校生を対象としている「フィールドスタディ(職業体験)」を施設として受入れる準備

5. そのための事業内容

- ①新型コロナウイルス感染者数減少の頃に、会議実施。
- ②団地内公園の清掃活動、町内クリーン活動への参加
- ③2022年度内「フィールドスタディ(職業体験)」の受け入れ。

6. プロジェクト推進体制

主なメンバー、特養生活相談員、GH管理者がボランティア調整。

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
4月	運営推進会議の再開	地域住民、包括、行政職員、GH管理者等、特養相談員	継続的な交流、第3者評価含める。	4月実施。以降、新型コロナウイルス感染症に伴い、2022年度は計3回まで。	今年度は、市内でも恐らく瀬戸すみれ園のみ、開催されていたと報告あり。地域住民も施設内の動きが分からないため、会議で活動等聞くことができ良かったと意見。
毎月	花壇の手入れ (団地が管理している花壇)	団地内住民 施設職員	住民の高齢化及び参加人数の減少	新型コロナウイルス感染者数が多かった月の前後は行わない。7月、8月、12月、1月、2月実施せず。	同法人の養護老人ホームと月替わりに参加。感染症が緩やかになっている頃、施設入居者が飛び入りで参加された。入居者には参加したい方もいるため、来年度は状況に応じて参加を促していく。
6月	団地内公園清掃活動	団地内住民と施設職員	住民の高齢化による参加者減少。	団地内住民約60名 施設職員約10名	感染症の影響から参加者減少。マスクをしながらの活動は、若い施設職員も体力を奪われた。
11月	「フィールドスタディ（職業体験）」の受け入れ	市内中高生 施設職員	福祉教育のため 今後の人材確保も含める	市内の高校に通う生徒5名が参加	生徒の中には親が医療や福祉の仕事をしていることで興味を持ち、高齢者施設への訪問を希望していた。 限られた時間内では、施設内の説明のみ。感染症の影響から利用者との関りはなく、体験活動としては物足りない感じであった。

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

- ・感染症の問題から様々な交流、貢献活動が減ってきた。
- ・感染症で制限がある中、何が出来るのか考え、地域交流、を継続的に実施していく必要があった。
- ・地域貢献活動を継続的に行うためには、日々業務を行っている職員への周知や参加できる体制を整え、理解をしてもらうことも必要
- ・民事再生以降、様々な影響があったなかで、外へ発信していくことも考えながら取り組む姿勢を継続していきたい

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	運営推進会議の再開	年 3 回実施	世間の感染者数の影響で開催できないときがあった
2	施設全体として取り組みやすい地域貢献活動	団地内清掃活動 花壇の清掃活動	団地内公園の清掃活動は 1 回のみ参加 清掃活動は、感染者数の影響によっては、中止方向もある。
3	フィールドスタディ（職業体験	高校生参加	当初は上半期に行う予定であったが、2022 年 5 月以降徐々に感染者数増加になり、受け入れ検討となる。11 月に受け入れできる。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2023年度の取り組み	新型コロナウイルスが感染症法上で 5 類相当になることで、制限緩和、脅威である意識が少なくなる。今年度から、徐々に以前のような関りに戻ることと思ひ、運営推進会議内で地域との関りを再開できたらと思ひます。
中長期的取り組み	防災訓練、清掃活動等、以前の関りを継続を行っていく。運営推進会議でやってみたいこと、困っていることあれば、新たな取り組みとして考えていきたい。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	新型コロナウイルス感染症の影響で外との関りが希薄になる。まだまだ、入居者、利用者が直接地域の方々と関わることは難しいと思われるが、職員と地域との関りは継続する必要あり。
施設長	民事再生、新型コロナウイルスの影響は、施設内の他、利用者様、家族様、地域の方々に不安や混乱がありました。法人名及び事業所名も変更となり、新たな施設として出発したいと思ひます。

コロナ禍においても施設、地域との繋がりを継続していくために

【尾道ブロック】 養護老人ホームひかり苑

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

1. 施設近隣の学校が廃校となり、町内の高齢者も多く、またコロナ禍で地域との関わりが薄れているため、地域との具体的な支援策を検討する。
2. 開かれた施設として、地域の方が来ていただきやすい施設づくり

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

施設をもっと身近に感じてもらい、地域の方にとって支援できる開かれた施設になること。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の”見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域包括、地域の福祉関係施設、地域への支援づくり
2	地域住民が気軽に訪問できる施設づくり

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	地域包括支援センターと事業所内で協力し合い、認知症カフェ、シルバーリハビリ体操の開催
2	苑内所有の菜園にて作物の収穫作業を、近隣保育園、幼稚園、地元住民の参加促進

5. そのための事業内容

- ①地域包括支援センター及び老人介護支援センターにより、認知症カフェ、シルバーリハビリ体操を開催する
- ②近隣保育園、幼稚園へ苑内菜園の収穫作業に参加を促す。

6. プロジェクト推進体制

菜園に関わる主たるメンバーは、施設長、養護相談員、養護介護職員、養護利用者にて植栽から収穫作業。
近隣の保育園、幼稚園へ連絡調整を行う。
認知症カフェ、シルバーリハビリ体操は老人介護支援センター相談員、地域包括支援センター等で開催調整を行う。

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
6月	畑 耕うん、マルチ張りなど さつま芋の植栽 400本	施設長 養護相談員 養護介護職員 養護利用者	町内の学校、幼稚園は廃校廃園。 施設に園児を招き、養護利用者 の方と一緒に作物収穫の喜びを 楽しんでもらう。きっかけ作り を増やしていく。	耕うん、マルチ張り、植栽から 作物の手入れ、収穫まで職員、 養護利用者が主体となって行 った。	保育園、幼稚園については、園 児、先生の皆様に大変喜んで芋 ほりを行っていただきました。
6月	イノシシ柵の設置	施設長、養護職員、養護利用者	また近隣地域住民との関わりを 深めるため。	収穫作業を10/19、10/25、10/26 に保育園、幼稚園が収穫に来苑 した。(128名)	近隣地域住民の方は少人数では ありますが、参加していただい ました。
7月	さつま芋畑の草取り	施設長、養護職員、養護利用者		他、養護・特養在苑者、地域の 住民が参加した。(10名)	
8月	イノシシ柵の増設設置	養護職員			
9月	近隣地域住民へ収穫のお知らせ	施設長、養護職員、相談員			
9月	保育園、幼稚園へ収穫のお知らせ	施設長、相談員			
10月	保育園、幼稚園作物収穫	施設長、養護相談員、養護利用 者、特養相談員	認知症の方やその家族、地域住 民の方など誰でも自由に参加で きる集いの場の提供。相談、情 報交換などを実施する。	シルバー体操も年間計画を立案 していたが、コロナにより、9 月から開催。参加者は平均10 名程度。 その都度、シルバーリハビリ体 操の先生がプログラムを変えて 実施。	感染蔓延防止対策を万全に行 い、提供するお菓子は個包装、 お茶はペットボトルにするなど の配慮を行った。今後も開催時 には感染防止対策を怠らないよ うに努める。
	地域住民作物収穫	施設長、養護職員			
9月	シルバーリハビリ体操	地域包括支援センター、老人介 護支援センター相談員、リハビ リ体操指導員			
	認知症カフェ	地域包括支援センター、老人介 護支援センター相談員		認知症カフェの年間計画を立案 するも、コロナにより9月より 開催参加者は平均10名程度。 ギターを用いて歌謡曲などを歌 唱や女性会の踊り披露等	

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

菜園の管理を職員がほぼ中心になって行っていたが、今年度は定期的に参加いただいている養護利用者の方が積極的に活動に参加していただき、作業の効率化が図れた。
認知症カフェ、シルバーリハビリ体操については、今年度は同日開催とし前半にシルバーリハビリ体操を行い、その後認知症カフェとして開催した。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地域包括支援センター、施設事業所内で協力し合い、認知症カフェ、シルバーリハビリ体操の開催	コロナ禍であり、上半期は活動があまりできなかったが、下半期は毎回10名程度の参加があった。	場所や時間、回数などを工夫し、多くの方に参加いただけるよう検討する必要がある。
2	苑内にある菜園にて作物の収穫作業を、近隣保育園、幼稚園の参加促進	3施設の園児、先生に参加して頂き、また大変好評であった。	次年度は、もう少し養護利用者の方の活躍の場をもう少し増やせていけるよう調整の必要がある。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2023年度の取り組み	近隣の幼稚園（保育園）まで出向き、交流の機会を生み出す。 受け身の活動ではなく、能動的に「出向く」活動を行う。
中長期的取り組み	近隣の幼稚園、小学校に出向き、まずは先生方に当法人の紹介に加え、現在の幼保に関する活動を紹介し、新しい関係づくりを依頼し、また町内の老人会にも協力を仰ぎ、農作物の栽培方法を指導していただける関係も構築していきたい。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	コロナ感染症も収束に向かいつつある中、少しでも地域へ出向く機会をつくり、当法人を知っていただき、つながりを作る。
施設長	当施設が位置する原田町は少子化が顕著であり、数年前に幼稚園、小学校、中学校が隣接の地に統合された。そのようなこともあり、日頃から幼児を含めた低年齢層の子供との触れ合う機会がない。そんな中、菜園活動を通して、市内幼稚園（保育園）に通う子供たちとの触れ合いは、言い尽くし難い安らぎのひとつとなっている。 当法人施設の入所者、近隣の幼保に通う子供たち、町内の高齢者、職員が協力し合い菜園活動を行うことで一体感が醸成され、支援していただける施設、信頼していただける施設、開かれた施設へとつながると思う。 少子高齢化という課題に対し、町内が一体となれる取り組みの継続実施を目標とする、

認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり

【三次ブロック】 特別養護老人ホームすいれん

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

- 周りの地域住民は、事業所運営に関して協力的であり、ボランティアの提供など様々な運営協力をしていただいている。その一方で、事業所として地域で果たす役割は介護保険サービスの提供に留まっている。全般的に地域との関りが限定的である。
- ・三次市三次町は、住民の地域連帯の意識は強いものの、認知症の方が住みやすい町としては課題がある。在宅サービスを提供するなかで、利用者の認知症状を起因とする苦情を受けることもある。誰もが住みやすい町づくりを目指す必要がある。
 - ・新型コロナウイルスの影響により、地域の高齢者について孤立している方々が存在している。事業所としての関りを検討している。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域住民が共生を意識して、認知症高齢者が困っている場面に遭遇した時、「どうされましたか」と声をかけることができ、「〇〇へ連絡しますね」と適切に関係機関に繋げることのできる地域

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の"見たい未来"を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域住民の認知症に対する理解が進み、偏見が軽減される。
2	医療福祉関係者が認知症に対する社会資源を有効活用できる。
3	関係機関の横のつながりが強く、連携がとれる。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	認知症カフェを継続的に実施して、地域住民に対して共生の機運を高める。
2	新型コロナウイルスの影響により、孤立感を感じている高齢者の支援を具体化させる。
3	関係機関と連携を図り、地域ケア会議を発足させる

5. そのための事業内容

1. 認知症カフェをはじめとした、認知症に関連したイベントを開催する。

- ① 認知症カフェの開催
- ② 認知症関連のイベントの主催
- ③ 認知症関連のイベントへ参加協力

2. 関係機関と協議 地域包括支援センター、社会福祉協議会と協議して高齢者の方を地域で支えるための方策について協議する。

- ① 地域ケア会議の発足のための準備、協力
- ② 地域で孤立している高齢者と社会資源への結びつけについて検討

6. プロジェクト推進体制

三次市西部圏域（三次町、十日市）の介護サービス事業所3施設の管理者と本プロジェクト担当施設の職員4名で構成する。

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
毎月	認知症カフェを、可能な限り毎月開催する。	事業所職員と地域住民	認知症について、正しい理解の推進 外出の機会がない地域住民の外出機会の確保	令和4年度について新型コロナウイルスの影響により、計6回の開催に留まった。 令和4年6月から地域の要望により、2カ所目の認知症カフェを開設する。  (1カ所目のカフェの様子)	参加者へのアンケートを実施 ①満足度②次回の参加意向ともに、90%以上の肯定的な結果を得た。 自由記述のなかには、「認知症は特別ではないことがよくわかった」など、認知症に対して共生的な意識変化に関する意見も多くあった。 2カ所の認知症カフェの開催により、認知症への正しい理解に向けて、一歩踏み出せたと考ええる。

	関係機関と協働して、地域の認知症の方を含めた地域共生社会に向けた取り組みを行う。 地域ケア会議の発足協力、認知症関連のイベントへ参加協力	事業所職員と地域包括支援センターを中心とする関係機関	地域ケア会議開設による地域の福祉ニーズの把握 地域住民を対象とした地域共生社会への機運づくり	(2カ所の認知症カフェの様子) 地域ケア会議の立ち上げのための準備会議へ参加 (令和4年12月・令和5年1月) 事業所として認知症の取り組みを行うことで、認知症関連のイベントへの参加協力がある。 認知症サポーター養成講座への協力、地域の認知症予防講座への協力、認知症関連の委員会について役員協力の依頼、認知症研修の講師依頼など。 (小学校への認知症サポーター養成講座の様子)	令和5年3月に事業所の所在する地域で第1回目の地域ケア会議を開催することができた。 地域共生社会に向けて、参加者と共通認識をもち、地域ケア課題に取り組んでいく。 事業所について、関係機関より認知症への取り組み・地域共生社会への取り組みを実施する事業所として認知され始めている。
--	---	-----------------------------------	---	--	--

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

プロジェクト参加施設は、それぞれの事業所の特色を活かして活動している。取り組みをより実のあるものにするためには、法人内、事業所内で方向性を明確にし、プロジェクト委員だけでなく、多くの職員で関わる必要があることを再認識した。特に施設長のリーダーシップが求められることを感じた。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	新型コロナウイルスの影響により、孤立感を感じている高齢者の支援を具体化させる。	外出の機会を求めているが、地域サロンなどの通いの場と結びついていない地域住民が多数存在することを関係機関に問題提起を行う。	新型コロナウイルスの影響もあり、具体的な動きには繋がっていないと思われる。 事業所としても、地域サロン等、地域にある社会資源を把握して、地域住民へコーディネートしていく。 場合によっては、地域サロンの運営に協力することも検討する。
2	認知症カフェを継続的に実施して、地域住民に対して共生の機運を高める。	認知症カフェは、新型コロナウイルスの影響により、計6回の開催に留まった。 令和4年6月から地域の要望により、2カ所目の認知症カフェを開設する。 令和4年度は延べ人数151名の参加となる。 参加者から好評を受けており、今後継続していくことができれば、認知症への理解の推進に繋がっていくと考える。	認知症カフェとしての集まりというよりは、事業所が開催する楽しい集いに参加したいとの要望が強い。認知症について、相談を受け付けるような雰囲気ではない。 1と関連して、地域サロンとのすみ分けを実施する必要がある。
3	関係機関と連携を図り、地域ケア会議を発足させる	令和5年3月に事業所の所在する地域で第1回目の地域ケア会議を開催することができた。	地域ケア会議の方向性が定まっていない状況であり、地域にある介護事業所として、認知症の方が住みやすい地域づくりのため意見をしていく。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2023年度の取り組み	2カ所の認知症カフェを毎月開催して、認知症の正しい理解を地域に広めていく。 認知症関連のイベントに参加協力をし、事業所としても研修会やイベントを開催する。 地域ケア会議が実効性のある会議運営となるように、参加協力を行っていく。
中長期的取り組み	単発的に認知症普及のイベントを開催するのではなく、各団体、関係機関と横のつながりを強化して、同じ方向性のもとで協働して取り組みを実施していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員 施設長	地域の中で活動すると、一つの活動から繋がりが生まれることを感じた。自施設の取り組みから言えば、地域住民に認知症についての調査をすることで、認知症についての調査結果を得るだけでなく、関係機関に認知症への取り組みを実施している事業所として認知され、様々な協力依頼を受けることとなった。
-----------------	--

離島の未来を担う福祉拠点作りー地域で高齢者を支える未来ー

〔東広島ブロック〕 特別養護老人ホーム大崎美浜荘

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

現在島の高齢化率は47.2%と広島県第3位となっているが、地域の子ども達が高齢者福祉に興味・関心がないことが課題である。今後、島の人口減少が懸念されており、高齢者施設・在宅サービスのみならず、地域を支える人材不足や、住み慣れた地域で最期を迎えるための終末期支援が困難となる。また、高齢者のみの世帯が増加しており、介護者が一人で悩んだり孤独を抱えている現状がある。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

大崎美浜荘(大崎福祉会)の人材(専門職)が地域に出て伝えることで、福祉の担い手が育ち、高齢者・介護者家族を孤独にさせないことにより、地域で最期まで暮らしやすい島となる

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の”見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	「大崎美浜荘の人材」＝「町の財産」となり、将来の町の福祉を支える仲間が増える
2	地域住民が住み慣れた地域で最期まで暮らせるための関係づくりが整う
3	大崎美浜荘の職員が地域の利用者・利用者家族の悩みに共感し一緒に考える存在になる

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	こども世代に介護・看護の仕事を伝えたり、死生観教育等の出前授業が実施できる
2	高齢者や介護者家族がお茶を楽しんだり、話し相手がいる馴染みの場所が提供できる
3	自施設のショートステイ利用者の居宅サービス担当者会議に現場の介護職員が出席する

5. そのための事業内容

- 大崎上島町教育推進プランである「大崎上島学」と連携し、島の小・中・高等学校で出前授業を行ったり、自施設に生徒を招き介護体験等を行う。
- 地域の誰でも参加できる場所づくり(認知症カフェなどという名称にこだわらず)
- 「サービス担当者会議連絡票」を作成し、担当者会議の予定が入ったら相談員から日時と場所などを記載したものを現場職員へ知らせ、出席できるよう業務調整を行う

6. プロジェクト推進体制

プロジェクト責任者:施設長藤原 役割:地域で行う事業の責任者、教育委員会・各学校との連絡調整

メンバー:介護士西川 役割:地域の誰でも参加できる場所づくり、ショートステイ利用者の居宅サービス担当者会議出席に向けた業務調整

メンバー:看護師高原 役割:大崎上島学での出前授業、依頼に応じた授業内容の検討、授業後のアンケート依頼・集計

*出前授業や介護体験は、各専門職が学校の依頼に応じて対応する

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
6～ 7月	・学校や関係機関と関係作り	・教育委員会や学校関係者と面談(施設長藤原・高原Ns)	出前授業や実習の案内	・大崎海星高校2年生に出前授業、施設見学、利用者との交流、生徒が実践する福祉プロジェクトのアドバイザーとしての役割を担った。	・アンケート結果より、高校生の「福祉」に対するイメージはアップができた。
8月	・9月～1月までの授業に参加するための打ち合わせ	・大崎海星高校2年生13名と講師2人と施設長藤原、西川CW、高原Ns	高齢者福祉のイメージアップ		・「直接会えない」という課題の中から、オンライン面談など、新たな方法も発見できた。
9～ 1月	・出前授業、施設見学、zoomでの利用者との交流会	・美浜荘利用者、美浜荘職員(CW、調理員、事務職員)			
11月	・現場職員が担当者会議に出席するための起案書作成	西川CW、ユニットリーダー、特養課長、相談員、施設長	・利用者、利用者家族の悩みに共感し一緒に考える存在になる	・大崎上島中学校1年生に福祉の出前授業(福祉とは、介護の仕事、認知症、命等)実施	
11月	・ショートステイ職員に周知	・ショートステイ職員			
12月 ～	・ショートステイ利用者の担当者会議に実際に参加	・ショートステイ職員、施設相談員、担当CM、利用者、利用者家族		・ショートステイ利用者の担当者会議にユニット介護職員が現時点で3名参加	・参加した職員の利用者に対する想いが強くなった。また、利用者の事がよく分かった。
2月	・出前授業	・大崎上島中学校1年生、施設長、西川CW、高原Ns	・大崎上島学 ・高齢者福祉のイメージアップ	参加した利用者の数は4名	課題は、勤務の調整ができれば、随時参加したいと思っている。他職員への参加の促し。

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

・相談員としては、現場の職員が担当者会議に出席して欲しいというご意見を聞けた。

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	こども世代に介護・看護の仕事を伝えたり、死生観教育等の出前授業が実施できる	・広島叡智学園の介護実習研修会開催 ・大崎海星高校での出前授業、自施設での介護体験実施。 ・大崎上島中学校１年生（大崎上島学）の出前授業実施。	今年度も継続して教育委員会や学校関係者と連携した取り組みが必要。
2	高齢者や介護者家族がお茶を楽しんだり、話し相手がいる、地域の誰もが参加できる馴染みの場所が提供できる	なし	場所の確保や名称など今後検討していく。
3	サービス担当者会議に、現場の職員が参加できる環境を先ず作り、実際に参加する。	実際に担当者会議に参加することにより、利用者様の家での様子、ご家族様の想いが理解でき、実際にケアに活かせた。	担当者会議が突発的にあるため、相談員と短期入所の職員間で連絡票を作成し、当日の勤務を調整して出席できるようにした。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2023年度の取り組み	・現在取り組みを行っている学校事業や、ショートステイ利用者の担当者会議に現場職員が出席するなどの取り組みが継続して行える ・地域の誰もが参加できる場所づくりが行える
中長期的取り組み	・様々な現場職員が担当者会議に出席することで職員の意識がどう変化しケアにどう生かされたかなどの評価をユニット会議で行うことができる ・学校担当者との関係性が継続できる ・夏までに地域の方が集まれる場所の確保ができる →その後定期的な開催を目指す

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員

感染症の流行や人材不足、日常業務との並行などネガティブなことに目がいきがちになりますが、こんな状況だからこそできることがあると方向の転換をすることの大切さを、この取り組みを通じて学んでいます。

私たちの住んでいる地域は、離島であり過疎化がすすみ、子供たちも進学や就職のため島を離れるという地域性があります。この取り組みを始めるにあたり、私たち自身が地域の皆様のつながりに支えられていると感じることも多いです、継続して地域と共存していくことがこの島の高齢者が暮らしやすい地域づくりにつながると考えています。

施設長

これまでは地域に何かをして欲しい気持ちの方が強かった。でもこのプロジェクトに参加し取り組みを始めて見ると、施設から動き出し働きかけることが大切なんだと感じた。プロジェクト会議では他施設のがんばりを知ることで励みになり、助言も力になるので、このプロジェクトへの参加は有意義だと思う。

我が町は県内有数の高齢化先進地域なので、自施設の取り組みが今後他の地域にも訪れる高齢化社会の参考になれば幸いです。

必要とされる養護老人ホームになるために ～緊急受入に特化した施設を目指して～

〔呉・海田ブロック〕 養護老人ホーム呉清光園

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

- ・現在、呉市における養護老人ホームの入所待機者がいないため、定員確保が困難な状況になっている。待機者を待つだけの運営方法に限界が来ており、地域に必要とされる施設になるために地域貢献的な付加価値が求められている。
- ・感染症の拡大も大きく影響し、施設の来訪者も減少傾向にあり、地域に対して施設の内容や状況を伝えきれておらず、閉鎖的なイメージがある。
- ・感染症の拡大により地域での人間関係が希薄になっており、生活に困っている方々の情報が各関係機関に入りにくい状況になっている。呉市高齢者支援課の窓口にも緊急の問い合わせが増大しており、ショートも含め、高齢者の緊急時における受入先がないという問題を当園で対応するためにはどうすればよいか検討する。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

呉市内の生活に困っている高齢者を対象としている養護老人ホームに緊急受入としての機能をプラスし、地域の困りごとを解決できる受け皿の一つになることで地域貢献していく。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の"見たい未来"を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域の方々が施設内容に関心を持てる特色を作り、閉鎖的なイメージを変えたい。
2	各関係機関及び地域が求めるニーズを把握し、措置施設のできることを増やしたい。
3	災害時において高齢者だけではなく地域住民も避難できる場所として認知していただく。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	呉市内の緊急性の高い高齢者を対象に施設として緊急受入を実施する。
2	情報共有を密にするため、呉市高齢者支援課との定期的な報告会を開催する。
3	地域及び各関係機関に災害時における地域住民の避難場所として認知してもらう。

5. そのための事業内容

- ①施設緊急受入の実施：緊急受入を実施するために、呉市高齢者支援課と緊急受入の対象について協議し、契約対象の幅を拡大し、受入実績を作る。
- ②行政のニーズ把握：呉市高齢者支援課窓口での地域からの相談内容を把握するため、長又は担当者との話し合いの場を定期的に実施する。
- ③地域避難拠点の周知：地域の市民センター長と協議し、災害時における地域住民の避難が可能な施設であることを知ってもらう。また避難拠点であることを地域に周知してもらう機会を作り、避難場所になることで施設見学・紹介を通して施設の閉鎖的なイメージを開放的なイメージに変えていく。

6. プロジェクト推進体制

- ・施設内地域プロジェクト委員会（法人本部・施設長・生活相談員・看護師・事務員・介護員・栄養士・調理員）
- ・呉市高齢者支援課
- ・地域関係者（市民センター・地域包括支援センター等）

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
令和 5年 3月 まで	・呉市高齢者支援課と協議し、呉市と施設での緊急受入に関する契約書を締結する。(施設の空室利用)	呉市高齢者支援課 施設長	日常生活が困難な高齢者の短期的な施設への緊急受入	緊急受入を含めた「呉市軽度生活援助短期入所事業」契約内容の協議	現在契約している「呉市軽度生活援助短期入所事業」の対象者に緊急受入の要素を追加した。
	・呉市高齢者支援課との定期報告会の実施。	呉市高齢者支援課 施設長	・呉市高齢者支援課窓口での地域からの相談内容把握 ・施設状況の報告	協議の結果、相互理解を目的として実施することとなる。	ほぼ月1回以上の課長又は担当職員と報告会を実施できた。 (8月はクラスターの為なし)
	・高齢者の緊急受入を施設が実施することを地域の関係機関に周知する。	市民センター長 施設長	施設の取り組みを知ってもらうことで地域住民に施設に興味・関心を持ってもらう。	緊急受入実施の経緯を説明。	説明の際にセンター長から相談として、災害時に現状だと危険区域の地域住民を避難させる場

					所はいくつかあるが、何名受け入れ可能かはその時しか分からないため困っていると話される。当園でその問題を解消するために常に何名か避難可能な環境が作れるか検討していく。
--	--	--	--	--	--

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

他施設の取り組みも感染症拡大により、閉鎖的になりつつある地域との繋がりをいかに維持・向上していくかを地域性や施設の特色を生かした内容に取り組みされており、当園も養護老人ホームの特色として地域で隠れている真に困っている方々を支援するにはどうしたらよいかを行政機関の窓口寄せられた相談事をヒントにできることを待つのではなく、まず試みることから始めようと考えようになりました。

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	緊急受入においては、呉市高齢者支援課と契約締結している「呉市軽度生活援助短期入所事業」の対象内容を変更し、施設の空室を活用した緊急受入を行う。	新たな契約締結により、今年度は３名の緊急受入を実施でき、２名が養護老人ホームへの入所に繋げることができた。	対象者の条件が適合せず、受入に繋がらなかったケースがあり、緊急性の範囲の緩和を今後進めていく必要がある。
2	地域及び市が養護老人ホームに求めるニーズを把握するため、呉市高齢者支援課の課長又は担当職員と定期的な報告会を開催する。	施設の状況を含めた報告会を月１回以上開催することができた。	対象者が６５歳以上の高齢者で要介護１までとなっているが、幅を拡大して６０歳以上で要介護２までできないか検討していく。
3	当施設を災害時における地域避難拠点として活用してもらうため、地域の市民センター長と協議できる機会を作る。	地域の市民センター長と協議するとセンターも災害時に確実に避難場所を確保したい思いがあり、検討していく方向となった。	対象者を高齢者に限定せず、地域住民も緊急避難が可能であるか、また何名を避難できるか等細かい調整が必要。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2023年度の取り組み	緊急受入できる対象者の範囲拡大を呉市と協議し、各関係機関に「緊急受入施設＝呉清光園」という方程式を定着させるために受入実績を重ねていく。また、地域包括支援センターや市民センターに施設の取り組みを知っていただく機会を多く作り、地域と施設との隙間を埋める貢献事業にしていきたい。
中長期的取り組み	地域の避難拠点になるために、高齢者だけではなく、災害時においては地域住民の避難拠点としての機能を施設に追加するための環境整備を行っていく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員 施設長	今回当園が行った取り組みは生活困窮者の受入機関である養護老人ホームとしての拡大機能の一環です。この緊急受入及び地域避難拠点化に施設が実施することで感染症拡大により希薄になりつつある地域関係機関や地域住民との関わりを再生するきっかけとし、気軽に相談事や悩み事が話しあえる関係性を作り、将来的に施設に対するイメージを閉鎖的から開放的に変えていくことにより地域に貢献できる要素を増やしていきたいと思います。
-----------------	--

地域との繋がりを取り戻したい! ～法人理念と地域貢献を考える～

〔廿日市・可部ブロック〕 特別養護老人ホームゆりかご荘 ケアハウスゆりかご

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

- ・法人理念にある社会貢献、地域に私たちのノウハウを還元するという理念がコロナ禍においてなかなか実現できていない。
- ・感染対策が最優先となり、地域との繋がりが持てなくなりどうしたら地域と繋がることができるか考えなくなっている。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

支援する・されるという枠を越えて、互いに支えあう地域を目指す
事業所、地域、人と人とが互いに必要とされる関係性の構築

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の"見たい未来"を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	事業所、地域の垣根を越え、人と人とが触れ合える姿
2	子供から大人へ、大人から子供へ互いの知識を広めあう地域
3	互いに行き来しての交流、高齢者の社会参加

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	施設に来ていただくための取り組み、それに向けての関係機関との連携
2	学校(子供)との関わりを持つための取り組み
3	施設での相談会や地域での介護予防教室等の実施に向けての取り組み

5. そのための事業内容

- ・地域にある関係機関との連携
- ・学校の授業への参加
- ・施設に来て頂くきっかけづくり
- ・事業内容の周知、参加の呼びかけ
- ・地域行事への参加

6. プロジェクト推進体制

施設内におけるプロジェクトチーム結成（相談員・看護職員・介護職員）

学校関係者（教職員・児童生徒・保護者）

民生委員

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで （取り組み内容と実施日）	誰が誰と （関わる人すべて）	何のために （目的）	実践経過	評価 （目的の達成度や今後の課題）
R4 10月	事業所内でのプロジェクトチーム設立	事業所	全職種で地域共生社会を考えていく	今年度チーム設立し、3回の会議を開催。今後の取り組みについて話し合いを重ねた。	地域共生社会について考えるきっかけづくりになった。
年内	学校訪問 小中学校への取り組みについての説明と協力依頼	事業所 学校関係者	地域との繋がりを再開するために方法を検討していく	コロナ禍で直接的な関わりは叶わなかったが、文化祭のDVDを提供して頂いた。	地域と共にある施設を目指していくための準備を整えていく。
	民生委員協議会への参加 取り組みについての説明と協力依頼	事業所 民生委員 自治会	考え方をまとめ、施設・事業所と地域の思いを共有する	民協定例会への参加、地域との繋がり、今後について思いを伝えた。	全職員への周知と意識づけが今後の課題。 コロナ禍でもできる事を考えることができるようになったが更に内容を充実させる必要がある。

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

- ・事業所と地域の思いを共有するためにアンケートを実施し、その結果を元に取り組みを考えていく。
- ・コロナ禍においても、メリハリをつけて地域と繋がっていく方法を考えていくこと。できないではなくどうしたらできるかを考えていく姿勢。
- ・定期的に関係機関との交流を図り、情報収集や共有を継続していく。
- ・組織で取り組んでいくことにより事業所全体で地域共生社会の実現に向けた意識統一を図る。

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地域の子供たちへ福祉の魅力を伝える方法を学校と一緒に考える。	学校へ訪問し、取り組みについて方向性を共有し、次年度の取り組みが実現できるよう代表者（校長）と話をした。	地域や学校、事業所の感染状況により実施できる内容に変更が考えられるため、対策を検討していく。
2	各地域の民生委員と交流を図り、地域課題・ニーズを共有し、相互理解を図っていく。	民協定例会に参加し、情報提供を行い、地域の方が事業所に対しどのような思いを持ち、何を求めているのかを知ることができた。	地域の方が事業所に対して抱えている相談しにくい環境を改善していくために交流を通して事業所へ足を運んでもらう。
3	地域住民が気軽に相談できるような事業所になっていくための方法を検討していく。	事業所での様々な取り組みについて地域に発信していく方法を検討することができた。	実際に実現していくために事業所内での情報提供、研修及び全職員への周知徹底が必要。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2023 年度の取り組み	地域のニーズと事業所の持っている強みを生かした取り組みを実施していく（認知症勉強会、カフェ等）。 学校や地域への出前講座を開催する。
中長期的取り組み	地域や学校との繋がりを途切れさせないようにし、災害時等有事の際にも相互協力が可能な関係性を構築していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	できない理由ばかりを考えるのではなく、「どうしたらできるか」を考え、事業所としてだけでなく、地域にある一つの資源としてどのように地域に関わっていくのかを考えていくことで職員の意識も変化し、人材育成にも繋がっていく。
施設長	地域において、少子高齢化・人口減少等、地域の実情を踏まえた福祉ニーズに対応する取り組みを地域住民と共に考え、地域貢献に向け、職員の意識統一、情報の共有が必要である。

Ⅳ. 令和4年度(2022)総括

1. プロジェクトについて

広島県老人福祉施設連盟が独自に「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」に取り組み6年目の取り組みとなりました。昨今、特に「軽費・ケアハウス」は積極的な公益的活動の推進により、その存在価値を発揮することが求められている状況にあるため、事業種別毎（①特養、②軽費、③養護、④その他（地域密着デイなど））に委員を選出し、本プロジェクトでその活動の後押しや支援を進めました。

また、昨年度からは、広島県老人福祉施設等研究発表会の場をお借りして、プロジェクトを通した取り組みを発表し、会員施設等にプロジェクトでの取り組みを広く知っていただくと同時に、地域拠点となりうる取り組みの意義を発信しました。連盟ホームページの本プロジェクト特設サイトには、これまでの取り組みを事例集等にまとめたものを掲載し、会員施設のみならず、広く社会に発信し続けてきました。

2. 令和4年度(2022)プロジェクトからの学び

プロジェクトでは、各施設の事業内容から地域との繋がりなどを理解し合い、相互に気づきを共有しながら自らの取り組みを推進できるよう後押ししました。それぞれ事業種別、事業規模、歴史、地域性は異なりますが、施設内でプロジェクトチームを編成しコロナ禍でさまざまな制約がある中、地域福祉拠点となりうる取り組みが推進されました。

本年度のプロジェクトから、プロジェクト推進のポイントを次のように感じました。①地域のニーズの把握に努めている、②チームでプロジェクトを進めている、③自らの強みを理解し活用している、④他の社会資源との協力や活用がなされている、⑤PDCAサイクルで推進できている 会員施設が地域にその存在を認められ、社会福祉法人としての使命を果たし続けていくためには①～⑤のような在り方が重要だと感じました。

3. おわりに

すべての社会福祉法人は、その高い公益性に鑑み、「社会福祉事業及び第26条第1項に規定する公益事業を行うに当たっては、日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者に対して、無料又は低額な料金で、福祉サービスを積極的に提供しよう努めなければならない」という責務が課されています。昨今、地域の福祉課題は多様化・複合化していると言われています。私たち会員施設は、地域の福祉ニーズ等を踏まえ、その課題解決に取り組みながら、地域にとって身近な頼れる存在であり続けられるよう取り組むべき存在だとこのプロジェクトを通して改めて認識しました。

令和5(2023)年7月
地域福祉拠点設立推進プロジェクト
委員長 小野 誠之



V . 關係資料

R4 発表事例

いろいろと不安はありつつも、目線は外へ

地域との関係性

施設の専門性

持続力・発想力

感染症と向き合い、出来ることを考えて

広島県・福山市

特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園

生活相談員 日下部 浩司

グループホーム 管理者

E-mail Address : spx-fukuyama.seto@heart-calm.jp TEL 084-951-3663

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

令和4年9月1日に社会福祉法人すみれ会 特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園へと名称変更。当施設は、約300世帯のある団地内に位置し、サービスとして、GH、通所介護、ケアハウスなど。隣接施設には、同法人の養護老人ホームもある。

※以下9p

<取り組み課題>

- ・2018年より地域との交流を図り、様々な交流を行ってきたが、2020年のコロナ禍以降、感染を恐れ交流に関する活動が減る。
- ・感染症との共生から、施設として何が出来るのか模索。
- ・2021年に民事再生となり、利用者様、家族様、地域の方々へ不安を与え、施設内も混乱となる。不安はありつつも、今出来ることを考え、再度施設としての魅力を発信していく。

<具体的な取り組み>

- ①コロナ感染者数減少時に、運営推進会議を対面で実施。約1年数か月ぶりの開催となり、地域の役員も初めて会う方々となり、改めて地域の実情把握、コロナ禍の情報共有を図る。
- ②団地内住民も高齢化が進み、若手の力を必要。団地内花壇の整理を、瀬戸すみれ園及び同法人の養護老人ホームの職員が毎月一回手伝いに参加。また、団地内公園等の清掃活動にも参加。
- ③年度初めに、企業が行っている高校生を対象としている「フィールドスタディ（職業体験）」を施設として受入れる手続き実施。

<活動の成果と評価>

- ①避難場所提供時の施設共有スペースを再認識していただく。
対面の中で団地内は、高齢化が進み空き家も出てきており、人の移り変わりが生じている。顔を知らない人もいるという問題から住民同士の助け合いも薄れているという課題がでる。運営推進会議内で助言を行い、少しでも地域課題へ協力出来ることを話し合う。
- ②団地内役員数名が花壇整理を行っている。役員は高齢であるため、施設職員の協力に感謝される。
また、花壇の整理には生活支援ハウス入居者も散歩の帰り道に途中参加され、楽しまれる。
団地内公園は大中3か所あり、清掃活動に参加者が多くても人手が足りない状況で、この度2年ぶりに施設職員が参加。
- ③「フィールドスタディ（職業体験）」を11月上旬に高校生5名対象に、各専門職が施設で過ごされる高齢者の衣食住について、体験型を通して伝えた。

<今後の課題>

- ・感染症で制限がある中、何が出来るのか考え、地域交流、を継続的に実施していく必要がある。
- ・地域貢献活動を継続的に行うためには、日々業務を行っている職員への周知や参加できる体制を整え、理解をしてもらうことも必要。

地域福祉拠点設立プロジェクト

～いろいろと不安はありつつも、目線は外へ～
感染症と向き合い、出来ることを考えて

社会福祉法人すみれ佑和会
特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園
生活相談員 日下部 浩司

社会福祉法人すみれ佑和会

特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園 紹介

福山市瀬戸町地頭分2721番地

令和4年9月1日に社会福祉法人すみれ佑和会へ法人名変更

事業所名 特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園へと名称変更

- | | |
|------------|------------|
| ◆特別養護老人ホーム | ◆短期入所生活介護 |
| ◆グループホーム | ◆ケアハウス |
| ◆生活支援ハウス | ◆デイサービス |
| ◆訪問介護 | ◆居宅介護支援事業所 |

施設周辺の地域の実情（瀬戸町小立団地）

- ・施設は団地内にある
- ・団地内の世帯数は約300世帯
- ・高齢化が進む（高齢化率約30%）
- ・独居世帯が増えている地域
- ・近隣に乳児院、養護老人ホーム等もあり、福祉拠点として協働していける環境がある

今までの貢献活動

2018年度より、地域福祉拠点設立推進プロジェクトへ参加

初年度、地域との関わり少なく、地域の実状把握のため、住民等招いて行われる運営推進会議へ参加し実状把握に努めた

その後、2018年度に住民主体講演会の場所提供、炊き出しを住民と行う防災訓練、認知症地域支援推進員を招き認知症講演会



2019年度には、団地及び町内清掃活動への参加、住民と施設にある段ボールを使用した手製ベッド作りを行った防災訓練、町内の医療福祉関係者が協同で行った認知症カフェ



2020年度以降、新型コロナウイルス感染症の発生。徐々に感染者数増加により、施設も地域住民も感染を恐れ交流に関する活動が減少し、活動は停止状態となる

2021年度には、前社会福祉法人サンフェニックスが民事再生となり、利用者様、家族様、地域の方々へ不安を与え、施設内も混乱となる



2022年度には新たな法人名として再出発となり、様々な不安はありつつも、今出来ることを考え、再度施設としての魅力を発信していく

【感染症との共生のため出来ることを考える】

施設内の意見として

- ・ 今までの貢献活動を、これからも行っていく
- ・ 感染症の状況により、スポットでも出来ることがあるはず
- ・ 新たな取り組みも考えるべき

【取り組み予定として】

- ・ 感染症拡大の懸念より、中止していた運営推進会議を地域住民等参加促し、開催へつなげる
- ・ 感染者数を考慮しながら、施設内職員が参加しやすい清掃活動への参加継続
- ・ 年度初めに、企業が行っている高校生を対象としている「フィールドスタディ（職業体験）」を施設として受入れる準備

【運営推進会議開催の再開】

コロナ感染者数減少時に、運営推進会議を対面で実施
約1年数か月ぶりの開催となり、地域の役員も初めて会う方々
となり、改めて地域の実情把握、コロナ禍の情報共有を図る



- ・ 以前より課題にあがっている団地住民の高齢化により、団地内花壇の手入れが年々苦勞になってきているとの意見
- ・ 地域清掃活動は感染者数が少ないときに行う予定

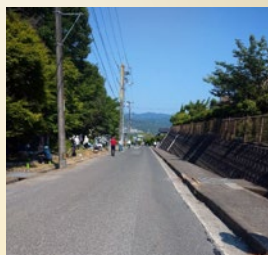
【花壇の手入れ】

- ・ 毎月月末、地域住民との清掃活動へ参加
- ・ 隣接している養護老人ホーム光寿園と月替わりに参加する
- ・ 暖かい頃は散歩されている施設入居者が清掃活動へ自主参加される



【団地内公園清掃活動への参加】

- ・ 地域住民60名以上が参加する、団地内にある大1か所、中2か所の公園の清掃活動へ参加
- ・ 施設職員10名程度、大1か所、中1か所の清掃活動へ参加
人手足りない草刈り機対応も行う



- ・ こちらの清掃活動へも施設入居者が飛び入りで参加した



- ・ 清掃活動へ参加している住民の半数以上が高齢の方であり年々労力が足りなくなっている状況



団地内清掃の気づき

- ・住民の高齢化が進むなかで、新型コロナウイルスもあり参加者の減少
- ・時期によってはマスクをしながらの活動は体力を奪う
- ・外は風通しが良くても密になっての行動ができない
- ・新型コロナウイルスの影響か子供たちが外であそぶ機会が減る ⇒ 公園利用頻度も減少となり、公園の草が生えやすくなる⇒清掃活動で回収する草、落ち葉等の量が多くなる⇒例年の対応回数では難しく、有志の方々が別で活動しないと追いつかない状況であった

【フィールドスタディの受け入れ】

- ・新たな職場体験、今後の人材確保、施設としての魅力発信及び向上を目的に、2022年2月に企業が行っている高校生を対象とした「フィールドスタディ（職業体験）」を施設として受入れることを考える
- ・企業のサポートがあることで、今後の時代に合った「職業体験」もできるメリット

フィールドスタディ（職業体験）

- ・2022年11月上旬に実施
- ・参加校は、福山市内の高等学校 1学年 学生5名が参加
- ・施設内で3時間程度のフィールドスタディ（職業体験）へ参加
- ・施設職員、専門職が参加
- ・介護、医療、食事について

フィールドスタディ内容

- ・施設見学(15分)
生活相談員



- ・介護事業の概要(30分)
居宅対応



フィールドスタディ内容

- ・ 高齢者の介護体験
車椅子の自走、介助(15分)
介護員、作業療法士



- リフト車両の操作(15分)



フィールドスタディ内容

- 高齢者の食事試食(30分)
管理栄養士
調理員



フィールドスタディ内容

- 認知症について(20分)
グループホーム管理者



- 高齢者の医療について(20分)
特養看護師



フィールドスタディ受け入れて

- ・ 学生5名参加され、職場体験としては短い時間ではあったが、福祉医療に興味のある学生が自分たちで調べて参加していたので、理解が早いように伺えた。
- ・ 職場体験は、福祉や介護施設を知ってもらう良い機会
- ・ 新型コロナウイルス流行から外部との関りが減っているなか、生徒、学生が将来の夢、その後の地域の発展や、人材不足軽減に繋げることが出来たらよいと感じる

今後の課題として

- ・感染症の問題から様々な交流、貢献活動が減ってきた
- ・感染症で制限がある中、何が出来るのか考え、地域交流、を継続的に実施していく必要がある
- ・地域貢献活動を継続的に行うためには、日々業務を行っている職員への周知や参加できる体制を整え、理解をしてもらうことも必要
- ・民事再生以降、様々な影響があったなかで、外へ発信していくことも考えながら取り組む姿勢を継続していきたい

ご清聴ありがとうございました

【本発表に関する問い合わせ先】

施設・事業所名：特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園

担当者名：生活相談員 日下部 浩司

電 話：084-951-3663

メール：spx-fukuyama.seto@heart-calm.jp

R4 発表事例

コロナ禍でも出来ることを

コロナ禍

地域との繋がり

生きがいづくり

地域の方と一緒に

広島県・尾道市

ようごろうじん
養護老人ホーム ひかり苑

生活相談員・ふじかわ まもる
藤川 守

老人介護支援センター相談員 藤井 悦美

sisetu@haradahikarikai.or.jp

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

広島県尾道市北部にあり、周りは田畑で高齢者の割合も増加している。近隣にあった幼稚園、小学校、中学校も廃校となり、地域とのつながりが薄れている。

※以下 9p

<取り組み課題>

施設近隣にあった小学校、中学校が廃校になり、また地域の高齢化が進み、またコロナウイルス感染蔓延防止により一層地域との関わりが薄くなりつつある。地域への具体的な支援策を検討し、施設を身近な存在だと認識してもらうために、地域へも出向くことも考えていかないといけない。

<具体的な取り組み>

- ・シルバーリハビリ体操、認知症カフェの開催
毎月第3水曜日に施設内にあるスペースを使い、老人介護支援センター相談員、地域包括支援センター職員と協力し、開催調整を行う。
- ・地域団体との交流
苑内にある菜園にて作物の収穫作業に施設長を始め、養護職員、養護入所者と共に植栽から収穫作業までを行い、近隣にある保育園、幼稚園へ連絡をし、養護入所者と一緒に収穫作業を楽しむ。

<活動の成果と評価>

今回の取り組みの成果として、市内のコロナウイルス感染症増加により、施設内でも活動出来ず、シルバーリハビリ体操及び認知症カフェを実施できたのは9月から実施し、9月参加者11名（Vr含）、10月7名（Vr含）、11月11名（Vr含）まん延防止のうえ実施。12月はクリスマス会を予定しており、多くの方の参加予定となっている。

菜園の収穫作業については、幼稚園、保育園の園児さんが10月19日に30名、10月25日には57名、26日に20名が参加され、収穫を楽しみました。

また11月初旬には地域の方も参加され、芋ほりを楽しみました。

成果として、リハビリ体操や認知症カフェにより、閉じこもり防止や他者との交流が取れたのではないと思われる。

また幼稚園、保育園においては、核家族化が進む中、高齢者との関わりや人間形成、課外活動の一環として行われたように思われる。

引き続き開かれた施設として、継続実施する。

<今後の課題>

今後の課題としては、コロナウイルス感染症の状況をみながら、地域の方が来やすい環境づくりに努めていきたいと思います。

コロナ禍でも出来ることを

～地域の方と一緒に～

養護老人ホームひかり苑

コロナ禍でも出来ることを

地域の方と一緒に



社会福祉法人 原田ヒカリ会
養護老人ホームひかり苑
養護施設課長 藤川 守

社会福祉法人原田ヒカリ会

【原田】

特別養護老人ホーム
養護老人ホーム
地域密着型特別養護老人ホーム
いきいき小規模ホーム
老人介護支援センター



【三成】

デイサービスセンター（一般）
リハビリ型デイサービスセンター
居宅介護支援センター



【東尾道】

リハビリ型デイサービスセンター



以前の地域交流

町内の小学校 授業参観
町内の中学校 職場体験
施設の夏祭り
盆踊り
運動会 etc



中止と
なりました



中止と
なりました



中止と
なりました

コロナ感染症蔓延防止も相まって・・・

平成26年3月 町内中学校 統合により廃校
平成29年3月 町内小学校、幼稚園 統合
により廃校、廃園



令和2年1月中旬に日本でコロナ感染症確認
その後、当法人でも施設内外行事、自粛に・・・

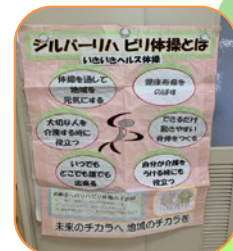
取り組み内容

シルバー
リハビリ体操

ひかりカフェ

幼稚園
保育園交流
芋ほり

シルバーリハビリ 体操



ひかりカフェ



養護の菜園を活用して



芋ほりをするために



芋ほりをするために



芋ほり前に・・・



芋掘りの様子



芋掘り・・・終わって



園児さんからは・・・

大きいお芋が
取れて
嬉しかった

小さい
お芋も可愛
かった。

おじいちゃんおばあちゃんに歌
を聞いてもらったり、けん玉を見
てもらってよかった。嬉しそうに
聞いてくれていたのが嬉しかった。

畑に来ていた優しいおばあちゃんが、何歳？
大きいねと聞いてくれた。
嬉しかった。

大きいお芋をおばあちゃん
に見せたら、すごいねって
言ってくれて嬉しかった。

家に持って帰ったら大きな
お芋だねと言われて天ぷら
にして食べたらとても美味
しかった。

お芋が美味し
くなるようにまだ
干してある。早く
食べたい。

家に帰って、芋掘りのたの
しい話をいっぱいしてお汁
にして食べた。

また先生からも

こんなに大きな畑で
ダイナミックな芋掘り
ができて、子どもたち
は大喜びでした。

施設のおばあちゃんと職員の方
に見に来ていただき、たくさ
んの職員の方に声をかけてい
ただきながら芋掘りができ、ツ
ルをとっていただくだけでも大
変だったと思うのですが、子ど
もたちは青空の下存分に楽し
ませていただきました。

その後どんぐりのあると
ころまでご案内いただき、
子どもたちは大喜びで、
12月の作品展では芋づ
るも、どんぐりも使わせて
いただきます。

施設利用者からも

あんな小さい子が大きな
お芋を掘っておった。
可愛いね。長生きせな
いけんなあ。

小さい子を久しぶりに見た。
可愛い。また来年も来て
ほしい。

2022年の芋ほり参加

	A保育園	B幼稚園	C保育園
園児	30名	57名	20名
先生	3名	5名	3名
合計	33名	62名	23名

地域の方：10名程度参加
養護、特養在苑者：20名程度

2022年の芋ほり参加者 158名

参加団体より（保育園）

地域との
交流

食育

子供たちの
楽しみ

保育園では
出来ない体験



尾道新聞に掲載

〔2023年（令和3年）10月19日（火曜日）〕

尾道新聞



芋掘り体験に大喜び 園児がお年寄りらと交流

【尾道市】10月19日、尾道市立ひかり苑で、尾道市立ひかり苑の園児と、尾道市立ひかり苑の職員らと、芋掘り体験をした。園児たちは、お年寄りたちと交流し、芋掘り体験を楽しんだ。園児たちは、お年寄りたちと交流し、芋掘り体験を楽しんだ。園児たちは、お年寄りたちと交流し、芋掘り体験を楽しんだ。

2021年（令和3年）10月19日（火曜日）

尾道新聞掲載

まとめと今後の活動

他者との交流
閉じこもり防止

高齢者との関わり
人間形成
課外活動

コロナが早く終息し、以前の様に地域との関わり（祭りなど）をもっていきたい。

感染防止に努めながら、少しずつでも、行動範囲を広げて利用者のやりがい、生きがいに努めたい。

御静聴ありがとうございました。

【本発表に関する問い合わせ先】

施設・事業所名：養護老人ホームひかり苑

担当者名：藤川 守

電 話：0848-38-0077

メール：sisetu@haradahikarikai.or.jp

R4 発表事例

認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり

～誰もが住みやすい地域に向けて～

認知症ケア

地域共生

社会資源

広島県三次市

とくべつようごろうじん ほーむ
特別養護老人ホームすいれん

施設長 たきもと ゆうじ
滝本 雄司

介護支援専門員 今西洋美

管理栄養士 新宅薫子

suiren@bell.ocn.ne.jp

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

認知症の方に優しい地域づくりを目指して取り組みを開始する。感染症の影響により、十分な取り組みとならなかったが、活動をする中で、地域の高齢者の実情を把握することとなる。また、地域活動を実施する事業所として、一定の認知を得ることができた。

<取り組み課題>

地域拠点プロジェクト施設として、取り組むこととなり、地域へヒアリングから、“認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり”をテーマに取り組みを行うこととした。

<具体的な取り組み>

令和元年に、地域住民を対象に認知症の方を含めた住みよいまち作りのためにアンケート調査を実施。N=181

アンケート結果を踏まえて、①認知症カフェを開設すること、②地域住民を対象とした研修会を実施すること、③町内で関係者と協力して地域ケア会議を発足させることを取り組む内容とした。

- ① 認知症カフェについては、感染対策期間を除き毎月開催することとした。
地域の求めに応じて令和4年5月より開催場所を1カ所増やして計2カ所で認知症カフェを開催することとなった。

- ② 関係機関と協力の上で、町内の住民を対象とした認知症の研修会を実施
令和元年11月

- ③ 地域ケア会議の発足について、関係者と協議を継続している。令和5年2月開設予定

その他、新型コロナウイルスの影響により、認知症カフェが開催できない時期（令和2年12月）に、認知症カフェの参加者を対象に新型コロナウイルスの影響による生活への影響について、電話にて質問紙法による調査を行った。

新型コロナウイルスについて1人暮らしの高齢者への、精神的な影響が大きいことを把握した。

また、地域で活動を行う上で、これまで、事業所が実施していた介護予防事業に参加していた方が、どこの地域サロンにも属さず、孤立している現状について、把握した。

<活動の成果と評価>

- ① 認知症関連の取り組みを開催することで、地域住民の認知症への理解に多少なりとも繋がったと考える。
認知症カフェ延参加者 227 名

- ② 地域の中で活動する上で、地域のサロン活動が十分に機能していないことを把握し、関係機関に問題提起を行った。

- ③ 認知症関連の取り組みを行うことで、地域の関係機関より、地域ケア会議発足のための協力依頼、地域の認知症予防講座、認知症サポーター養成講座、キャラバンメイト連絡会役員への協力など、多くの協力依頼を受けることになった。

<今後の課題>

- ① 2カ所の認知症カフェを継続して、地域の共生社会へ向けての取り組みを継続する。地域へのサロン等へ訪問型認知症カフェを実施予定
- ② 地域の高齢者の社会参加について、コーディネートや社会資源の開発を実施していく。

認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり

～誰もが住みやすい地域に向けて～

特別養護老人ホームすいれん

特別養護老人ホームすいれん

- ・利用定員 29名
- ・小規模多機能型居宅介護を併設（小規模多機能ホームすいれん）
- ・2009年1月 開設

開設時より介護予防教室（三次市介護予防事業委託）を年10回開催

（住民主体の集まりを推進するため令和元年委託事業終了）

本発表は令和元年6月～令和4年11月まで

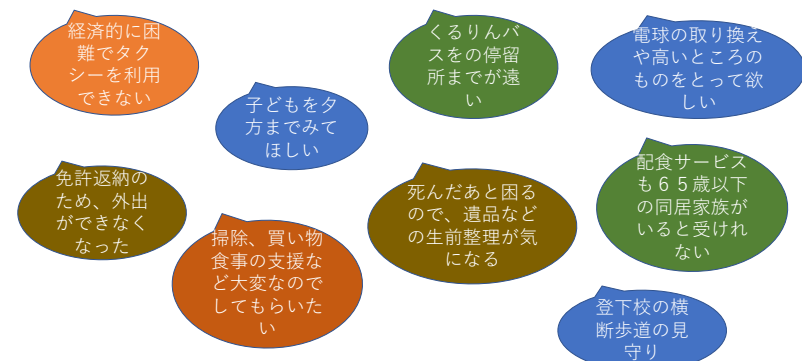
地域福祉拠点設立推進プロジェクト参加施設としての取り組み発表です



取り組みの背景

令和元年（2019）より広島県老人福祉施設連盟の地域福祉拠点設立推進プロジェクトへの参加施設となる

- ・地域に何ができるのか、介護予防教室の参加者、民生委員協議会、ボランティアグループなどに意見を募る。



様々な地域課題を把握

認知症について取り組むことに

- 一人の民生委員より、“**認知症の方が多くなって、どう声をかけてよいのか悩む**”との声があった。
- また、地域から小規模多機能居宅介護の利用者の**認知症**状を起因とする苦情を受けることもあった。

“認知症”を取り組みテーマとした

認知症について地域住民へアンケート

- 事業所が存在する日常生活圏域（三次市三次町、三次市十日市地区）を対象として、民生委員協議会、事業所が開催する介護予防教室の参加者、地域のサロン、ボランティアグループ等などに、**認知症に関するアンケート調査**を行う。181の回答を得る。



アンケート

1.性別・年代・住所	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	(人) 小計
男性(三次町)			3	3	16	12	13	3	50
女性(三次町)	1	3	7	7	12	22	35	5	92
男性(十日市)		1							1
女性(十日市)					1	3	3		7
男性(その他)			1		2	1	3		7
女性(その他)					4	4	6		14
年齢等不詳									10
								合計	181

アンケート調査から

- **認知症の人が地域で暮らす際、地域住民の協力が必要と考える人が多かった。**（Q認知症高齢者が生活するためには、地域住民の協力は必要だと思いますか。87%が必要と回答）
- **認知症の方へ、多くの方が偏見があると認識している。**（Q多くの方が認知症の人が偏見を持ってみられる傾向があると思いますか。ある、どちらかというところ81%）

今後、認知症について必要なこと等、自由にご記入をお願いします。

・計64の記述あり

①自分自身の認知症への心配、気を付けていること (14)

②認知症の方への対応方法 (10)

③認知症について考えてこなかった(7)

④地域での見守り体制について(6)

⑤認知症への偏見について(4)

⑥認知症の家族の方への対応方法について (3)

⑦その他(行政支援や家族の在り方、施設整備の拡充など)

本アンケート結果内容 分析、考察

・地域で認知症の方を支える仕組みの構築について、必要性を感じている住民が多くいる。

・誰もがなる身近な病気であると回答する一方で、**認知症への偏見を多くの方が感じており、また自分自身が認知症になることへの恐れを感じている方も多くいる。**

・自由記述から**認知症の対応方法（ケア方法）**について、知りたいとの意見が多くある。

・認知症の人は、“人の意見を聞かない”、“よく怒るのでそっとしておいた方が良い”等の意見もある。**認知症についての正しい理解を進める必要性もある。**

取組内容

- ・認知症の情報、知識について正しい理解
- ・認知症ケアの方法について理解
- ・認知症への偏見を軽減させる



- ・認知症カフェの開催
- ・地域ケア会議への発足への協力
- ・認知症学習会の開催

認知症カフェ

- ・令和元年(2019)10月第1回目をスタート



認知症カフェ



認知症研修会を開催
令和元年11月30日

- 地域住民
- 31名が参加

・テーマ
”認知症は普通のこと“

5回開催したところで 新型コロナウイルスの 感染が広がり中断

令和2年（2020）～令和3年（2021）

新型コロナウイルスの影響

地域住民の現状を 把握しよう

何かできること
はないか、、、

令和2年 (2020)12月 質問紙による電話調査 N= 55

・新型コロナウイルスの発生前後を比較して、①身体の変化②心理的变化③会話量④活気⑤外出頻度について聞き取りを実施した。

- ・ 1 身体に衰えを感じる 14人
- ・ 2 気分が落ち込むようになった 23人
- ・ 3 人との会話が減った 35人
- ・ 5 外出頻度が減った 54人

調査時に、「久しぶりに人と話をして涙が出る」「話ができ今日はよく寝れる」といった声があり、特に1人暮らしの高齢者について、人の関りが希薄になっている現状を把握した。

令和2年 (2020)12月 質問紙による電話調査 N= 55

(その他)

- ・ 早く始めてほしい
- ・ すいれんカフェを待っている
- ・ おやつが楽しみだった
- ・ いろんな地域の方と会えるので早く始めてほしい
- ・ 出来るだけ早く始めてほしい
- ・ すいれんの教室が無くなって生きがいが無くなった
- ・ 教室を頼りにしていたのにないのは残念
- ・ ○○さんが倒れたり、認知症になられたりしたのは教室がないから

集いの場がない

・ 新型コロナウイルスの影響により、人と会話をする機会がないなど、心の面で大きな影響を受けていることを把握する。

また、外出の機会が限られており、住民主体の集いの創出や地域サロンへの参加がほとんど進んでいないことを把握した。

令和元年(2019)介護予防教室（三次市介護予防事業委託）終了⇒**住民主体の集いの場 創設がほとんど進んでいない現状であった。**

取り組みの振り返り

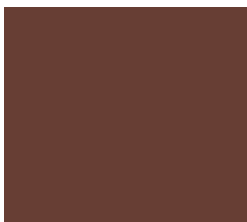
認知症カフェ (すいれんカフェ) 実績

すいれんカフェ
すみよしサロン

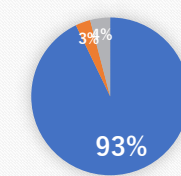
日時	参加人数	開催場所
令和元年10月16日	17名	すいれん内
令和元年11月20日	22名	すいれん内
令和元年12月21日	16名	すいれん内
令和2年1月18日	22名	すいれん内
令和2年2月15日	20名	すいれん内
令和3年11月20日	18名	地元公民館
令和4年5月21日	31名	地元公民館
令和4年6月18日	24名	地元公民館
令和4年6月19日	15名	地域集会所
令和4年7月13日	13名	地域集会所
令和4年7月16日	29名	地元公民館

2カ所目！

延227名

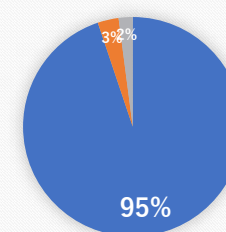


本日のメニューはどうでしたか？



■ 内容がわかりやすかった
■ どちらともいえない
■ 内容が分かりにくかった

次回も参加していただけますか？



■ また参加したい
■ どちらともいえない
■ もう参加したくない

認知症カフェ 参加者の感想（計11回集計）

認知症カフェ 参加者の感想 (自由記述) 一部抜粋

- ・夫婦で参加して一緒に学習し、助け合っていきたい。
- ・すいれんカフェは、ただお茶を飲むだけではないので勉強になる。
- ・説明はよくわかった。実際に看ることは壮絶です。
- ・認知症の方への気持ちを知ることができた。
- ・頭の運動が楽しい。
- ・わたしは軽い認知症だと思います。閉じこもりの防止と楽しみになっている。
- ・一人暮らしだと不安になる。ここで、忘れても大丈夫と言われるとホッとする。
- ・（認知症は）特別ではないことがよくわかった。
- ・楽しい、認知症カフェがあれば、デイサービスは行きたくない。
- ・これを縁に何かあればすいれんにお願いしたい。また困ったときにはすぐすいれんに相談したい。
- ・叱らないように気をつけたい。

認知症カフェや認知症研修会などを開催することで

関係機関との関係性も密になりました

関係機関とのつながり

- ・本プロジェクトの取組前
保育所、小学校、中学校とのつながり
民生委員や包括支援センターと利用者を通じての関係

- ・本プロジェクト後（上記プラス）
自治会長やボランティアグループなどと関係機関と顔の見える関係に

認知症に関連した各イベントに声がかかるようになる

- ・地域ケア会議発足のための協力依頼（立ち上げの会議へ3回参加）
- ・地域の認知症予防講座（2回）
- ・認知症サポーター養成講座（4回）
- ・キャラバンメイト連絡会役員への協力



感染対策が第一優先となり、新型コロナウイルスの停滞期にも積極的な活動ができなかった。

<活動の成果と評価>

- ① 認知症関連の取り組みを開催することで、地域住民の認知症への理解に多少なりとも繋がったと考える。
- ② 地域の中で活動する上で、地域のサロン活動が十分に機能していないことを把握し、関係機関に問題提起を行う。
- ③ 認知症関連の取り組みを行うことで、地域の関係機関より認知症関連の依頼を受けることになった。新しい関係を築くことができた。

“認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり”に向けて

認知症への具体的取り組みとして

- ・2カ所の認知症カフェを継続していく

認知症への理解の推進、参加者の社会とのつながりを含めて

訪問型認知症カフェ（地域へのサロン、各種集まりへ）

- ・認知症関連のイベントへの参加協力
- ・地域ケア会議への運営協力

その他

- ・地域住民の通いの場へのコーディネート

通いの場の情報提供、関係機関への働きかけ

【本発表に関する問い合わせ先】

施設・事業所名: 特別養護老人ホームすいれん

担当者名: 滝本 雄司

電 話: 0824-62-3322

メール: suiren@bell.ocn.ne.jp

広島県老人福祉施設連盟

令和4年度地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議 委員名簿

	所属ブロック	事業所名	職 名	氏 名	備考
役員等	東広島	特別養護老人ホーム 瀬戸内園	施 設 長	中川 勝喜	担当副会長
	東広島	特別養護老人ホーム 大崎美浜荘	施 設 長	藤原 貞弘	担 当 理 事
	廿日市・可部	特別養護老人ホーム 阿品清鈴	施 設 長	小野 誠之	委 員 長
担当施設	福 山	特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園	生活相談員	日下部浩司	R4発表
	尾 道	養護老人ホーム ひかり苑	生活相談員	藤川 守	
	三 次	特別養護老人ホーム すいれん	施 設 長	滝本 雄司	
	東広島	特別養護老人ホーム 大崎美浜荘	看 護 師 介 護 職 員	高原 由実 西川 慶	R5発表
	呉・海田	養護老人ホーム 呉清光園	施 設 長	前野 勝則	
	廿日市・可部	特別養護老人ホーム ゆりかご荘	生活相談員	松本 一樹	